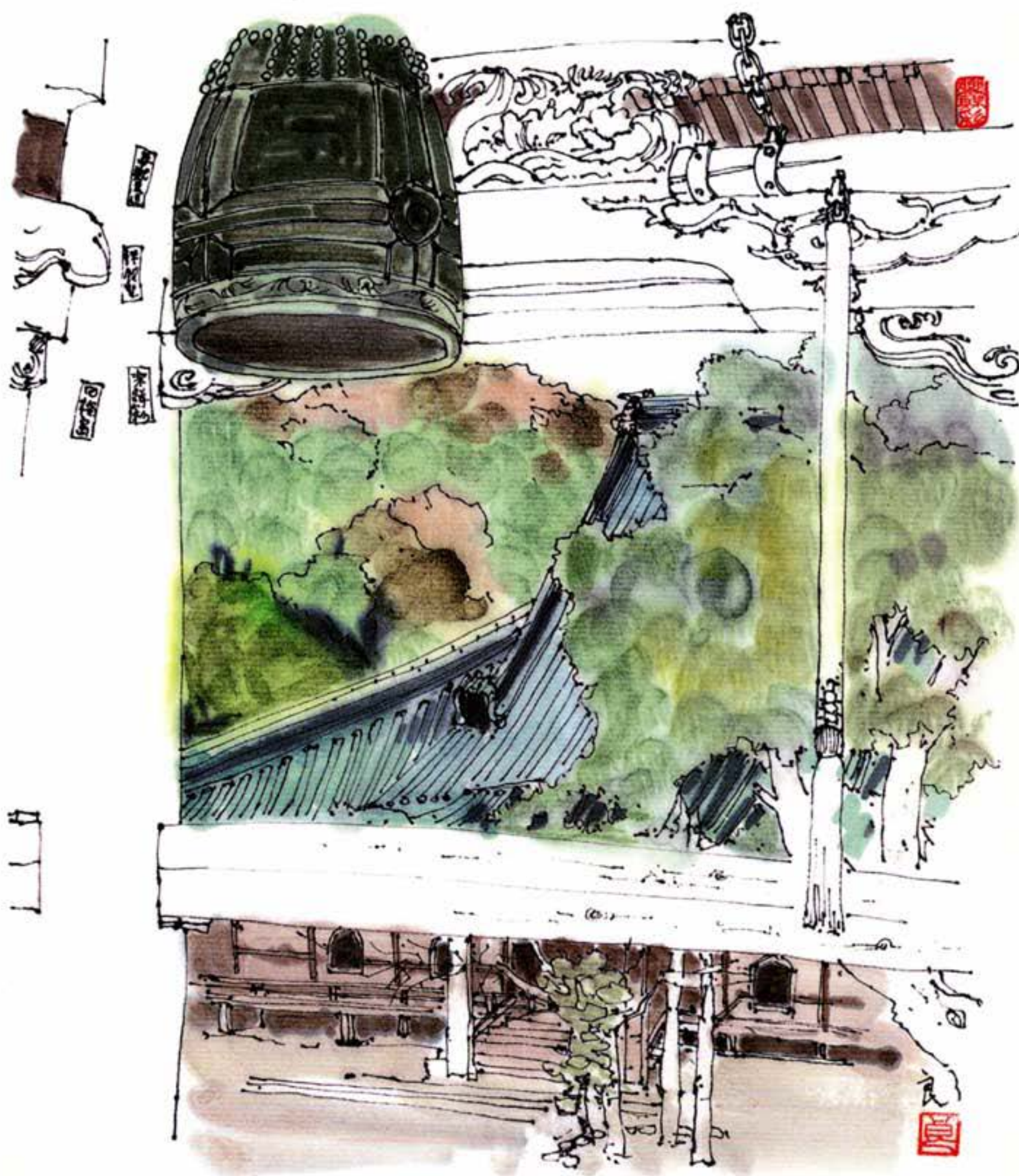


浄土

monthly
JŌDO

2・3

Feburuary-March 2007合併号





佛に引接の願あり

われに往生の志あり

なんぞ往生を遂げざらんや



「信心未発の人に三宝祈請を
すゝむる御詞」

九卷伝巻二下

七二二

浄土

2007/2・3月号 目次

私の死生観	高橋玄洋	2
表紙の言葉	桜井良夫	9
歌舞伎の春	古井戸秀夫	10
会いたい人 笹野高史さん①	関 容子	16
江戸を歩く 第四回	森 清鑑	24
響流十方	袖山榮輝	32
映像の中の寺院	佐々木美冬	36
下屋敷戒法寺句会	内藤隼人	40
Jフォーラム		43
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよろう	47
編集後記		48
表2 御法語		
表3 教えと法話	生野善應	



表紙題字=浄土門主 中村康隆猓下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

死生の観 私の

高橋玄洋

高橋玄洋 著
高橋玄洋 著
高橋玄洋 著

死生観とは言ってみたものの、これと言った死生観などありはしない。漠然と生き死について思うことはあったとしても、つきつめて深く考えたこともない。要するに怖いものからは逃げてきたのだろう。そんな怠惰な暮らしぶりだから信仰についても深く考えたことはなく、まして法然上人や浄土教のことなど『歎異抄』からの推察くらいで知識さえ皆無といった方がいい。そんなことでよくこんな文章を引き受けたものだと言われそうだが、それはそれ、長年文筆を生業としてきたので依頼されれば、条件反射的に手が上ってしまう。習性とは怖いものである。

淀川長治という映画好きのおじさんが居た。彼は講演を頼まれ演壇に上るとまず「来月の今日死ぬ淀川長治です」と自己紹介した。それから随分長く元気だったが、生きていく時間を限定することで、残された生を充実させたかったのだろう。気持ちにはよく分かる。少なくとも私のように怠惰に生死の問題から逃げて適当に生きているよりはよほどいい心掛けに違いない。死を目の前に引き据えることによって生の営みに鞭を入れていたのである。淀川馬も確かに第四コーナーに入っていた。

劇作の方の大先輩に『近松物語』などの名作を残した秋元松代というおばさんがいたが、このおばさんも一夜の旅でも必ず肌着を改め部屋を整えて、旅先でなにがあっても常に恥ずかしくない生き方を忘れなかった。これも淀川さんと同じでいずれも清廉な生涯だったと思う。

問題は私のような凡夫である。借金こそないが様々な恥じと疚しさを残すこと間違いな

い。それも今さら取り返しのかねことばかり、取り消しも言い訳も出来ない。長い歳月の間の自業自得だから諦めるしかなさそうだ。

そんな凡夫を救ってくれるのが仏さまだろうと自分勝手なことを言ってお茶を濁してきだが、周囲を見渡しても私ていどの輩は結構いそうである。

自己紹介が遅れたが、私も信仰と全く無縁に育ったわけではない。

父方の郷里は瀬戸内の島で一村一寺の浄土真宗。いわゆる安芸門徒の片割れである。教師として島を出ていた父は四十歳になって広島文理大（現広島大学）に入学した。金子大栄先生が京都を追放され同大学に講師として来られたことを知って矢も盾も堪らなくなつたらしい。

そう言えば母は娘時代に当時悪魔僧正と呼ばれていたあけがらすはや暁烏敏師のオツカケをやっている。四国に暁烏師を招いて講演会を開いたりしていたらしく、

「迎えられし小船にのればよりそいてよく来ませ里というたりしかな 敏」の短冊が残っている。

亡き父と母がどんな事情で結ばれたかは定かでないが、幼時抹香臭い家だったことは確かだ。広島では狭い長屋暮らしだったが、夜九時になると必ず一家揃って小さな仏壇の前に座ってお経を読んだ。小学二年の私にはただ父の背中を見ながら終わるのを待つだけの長い時間だったが、今でも御和讃くらい暗唱できるのはその頃の名残りである。

この長屋の枕元に金子先生の色紙が掛けてあった。

『今 今の今 そして今 大栄』

と書かれたもので、今という字は二年坊主でも読めたから、四つの今の字は羊一匹、羊

二匹と同じように脳裏の奥の方に染みこんだらしい。この今が生涯の教えとなった。中学に入って初歩英語で「現在進行形」というのに出会った時もまずこの色紙の文句が浮かんだ。

人生、「今」のINGしかないのだ。その連続を総称して一生と呼んでいるに過ぎない。後年五十二歳の時、中川一政画伯の「そんなことしてると殺されるよ」の一言に、忙し過ぎた脚本家を捨て画伯の鞆持ちに徹して文人生活に入れたのも「今しかない」が教えてくれた知恵だったと思う。決断してみれば、要するに過去の名と金を捨てればいいだけのことなのだ。

今更どうにも出来ない過去、当てに出来ない未来と、今しかない現在を別けて考える習慣はあの色紙から刷り込まれたものに違いない。あの「今」をもう少し深く掘り下げていけば、少しは真摯に生きてこられたのではなかったかと惜しまれる。

縁とは不思議なもので、「今」の色紙を見上げていた広島で大きな体験を持つことになる。長じて海軍兵学校に進学していた私は原爆投下の直後救援に入って放射能を浴び原爆症に苦しむことになる。しかし、今振り返るとこうしてこの歳まで生きているのだからそれ自体は大したことではなかった。問題はその数日間に見聞体験したことである。

一つは無数の無惨な遺体を見たこと、もう一つはその時私自身が人間でなくなっていたことである。被災者救援に入ったものの既に生存者は殆ど近郊に避難していたため実際にやったのは遺体処理の仕事だった。そのむごさと言ったらない。とても人間とは言えない姿で転がり泥にまみれて放置されていた。それも数限りなくである。地獄を見るとはああいうのを言うのだろう。

それ以上に堪えたのは、炭化した綺麗な遺体と生焼けで腐り始めている遺体とを区別したことである。悪臭にうじのたかり始めた遺体を運ぶのが嫌でたまらなかった。それまで純な軍国少年として濁り少なく生きてきたつもりだったから人間としての誇りを無惨にうち砕かれた。己のエゴイズムの存在に気付いた最初だったかも知れない。

更に、焼け跡をさまよってきた盲目の少女を裏切った体験である。この少女は髪が焼け背中の皮も垂れながら母親を探してさまよっていたのだが、二日後、比治山裏の救護所に連れていく役を私は命じられた。その時私は支給された大焼きおむすびを一つ持っていたのだが彼女に渡すことが出来なかった。長くは生きられない彼女より、お国のために働く自分が食うべきだと決めたのである。それも一日の空腹が我慢出来なかったからである。相手が目の見えないのをいいことに、軍服の裾を掴んで放さない少女を裏切ったのである。この時、私は人間でなくなっていたのだと思う。鬼だったのだ。

この罰^{バチ}はてきめん^{バチ}に当たり、以後二年原爆症に悩まされ死を目前に考えさせられることになるのだが、この体験は六十年経った今も私を大きく支配している。無数の遺体もそうだったがそれ以上に地獄は私自身の中にあつたことは大きな驚きだった。この驚きが後に私を文学に逃げ込ませることになる。

敗戦を体験した私より上の世代の人々は、誰でも生き残っている疚^{やま}しさをどこかで持っている筈である。ないとしたらよほど幸運だったか、逃げて生きているかのどちらかだろう。そう言えば恥じも疚^{やま}しさも死語になりつつあるようだ。困ったことである。

今一番怖いのは死ぬことより広島での私のように、生きたまま人間でなくなることだ。医学の発達によって寿命が伸び、生きている自覚なく周囲に迷惑をかけ続ける例も多いが、

意識も思想もしっかり持ちながら恥じも疚しさも忘れて生き延びるほど悲しいことはあるまい。昨今の世相を見ていると結構そんな人口が増えてきているように思えてならない。

以前、教育委員をさせられていた時、私は初等教育で祖父母などの危篤や臨終、葬儀一式を併せて三週間の休暇を主張したことがある。死の周辺を体験させることで生きている今を体感させるべきだと思ったからだ。

「危篤が持ち直したらどうするのか」「祖父母がその前に亡くなっている児童と不公平になる」「その間の学力低下をどうするのか」など一笑に付されてしまったが、今でも間違いいではなかったと思っている。人の死がどんなものか、幽明の別がどういうことか周囲の嘆きを見せるだけでも大いに意味があると思うからだ。少なくとも安易な殺人やいじめによる自殺などの減少に直接つながる筈である。それ以上に生きることの意味についての強い体験学習になるだろう。家庭が核家族化し入院先での他界が殆どという死の切実感の喪失こそ諸悪の根源と思うのは私だけだろうか。

信仰が今ほど粗末に扱われた時代は無かったし、今後この傾向は先進国でますます強くなっていくに違いない。科学が発達し、文明化が進むにつれて「信」ずること自体が無用化されるのは目に見えている。科学が分析、証明によって成り立ち、人間の総合的観点を見失っていることに世界が気付かない限り、人間は悟性も信仰も恐れ観念さえ失うことになるだろう。人間世界滅亡の不安はその辺りにあると思う。

数学の岡潔というおじさんが良寛禅師の『天上大風』の書を見て「ドカン！」と来たと言っている。禅師が命がけで書いたものを岡潔が命掛けて見たからドカンと来た。これが人間力と言うものだ。分析や証明なんかで人間解決出来るものではない。人間の総合的な

「いのち」と「いのち」がぶつかり合ってこそ人は人として進化していくのだと思う。それを可能にするのは理屈ぬきの「信」の世界の復活だけではあるまいか。

今こそ信仰生活の切望される「今」なのである。

プロフィール

高橋玄洋（放送作家・小説家）

1929年 島根県松江生まれ。早稲田大学文学部卒業。

1954年 日本教育テレビ（現テレビ朝日）に入社、「傷痕」で芸術祭奨励賞を受賞。

1961年 放送作家として独立。

1962年 「子機」で芸術祭奨励賞。「いのちある日」(64年)で久保田万太郎賞。その後も「判決」(65年)でテレビ記者賞、「朱鷺の墓」(70年)で日本放送作家協会賞、「繭子ひとり」(72年)で芸術選賞文部大臣賞、「黒い雨」でプラハ国際TV祭特別賞を受賞。また、小林和作・中川一政画伯の知遇を得て、現在、書・画・陶芸の世界で活躍。

表紙
の
言葉

え
桜井良夫



2・3

月
大本山

光明寺

鎌倉の大本山光明寺は、寛元元年（1243）、浄土宗の三祖良忠上人の開山。やがて七堂伽藍を整え、関東における念仏道場の中心となった。後土御門天皇より「関東総本山」の称号を受け、国と国民の平安を祈る「勅願所」となり、また徳川家康はこれを関東十八檀林の一つにおき、念仏信仰と仏教研鑽の根本道場となる。第九世観誓祐崇上人の時（明応四年・1495年）、後土御門天皇の勅許をうけ、引声阿弥陀経と引声念仏による十夜法要を勤めるようになり、浄土宗の十夜法要は此処から始まった。今も古式によって毎年十月十二日より十五日までの四日間盛大に法要を勤める。表紙にある総櫓、瓦葺の鐘楼堂は弘化四年の建造で、現在の梵鐘は昭和三十六年、法然上人七百五十年遠忌に当たり、鑄造せられたもの。重量三百貫。朝夕、梵音を鎌倉市街に響かせている。

春

歌舞伎の

古井戸秀夫



江戸の歌舞伎には、正月が二つありました。旧暦十一月の顔見世、正月の初芝居の二つです。歌舞伎の世界では、とくに顔見世のことを「芝居の正月」または「歌舞伎の正月」と呼んで、ほんとうの正月と同じように祝いました。

江戸の川柳に、「十月の晦日八百五町寝る」という句があります。大江戸八百八町のうち八百五町は寝静まっているのに、歌舞伎の三町だけが大晦日の賑わいをみせている、ということを詠んだものです。

川柳には、「二町まち、ふた月早い大晦日」という句もありました。「二町まち」というのは、日本橋堺町の中村座、葺屋町の市村座のことを指します。隣どうし軒を連ねて人気を競い合った中村座、市村座は、少し離れた木挽町にあった森田座にもまして賑わいをみせていました。「二町まち」は、越後屋のある本町通り、吉原の仲の町とともに江戸を代表する景色として、江戸土産の吾妻錦絵に描かれた江戸の名所でした。

江戸時代、世界一の人口百万人を誇った大江戸には、幕府に公認された劇場が三軒しかありませんでした。江戸の中村座、市村座、森田座、それを歌舞伎の大芝居、江戸三座などと呼んでいます。江戸三座の大芝居では、一年契約の原則が守られていました。江戸三座は「一年抱えつきり」というのが、江戸っ子の自慢でした。十一月の顔見世のときにだけ、江戸三座の歌舞伎役者の顔ぶれが変わりました。顔見世は、新しく決まった一座の顔を披露する儀式でもありました。十月晦日には、劇場の正面に総看板と呼ばれる大きな看板が掛けられます。芝居前には、蟲^{ひい}貝^かが贈られた積み物や酒樽、蒸籠、引き幕などが飾られます。夜になると、芝居茶屋の軒先には趣向を凝らした絹張りの「顔見世灯籠」が掛けられ、その光に誘われるように人々が群集しました。役者の家を廻って、門口でご祝儀に手拍子を打って祝う若者たちのことを手打ち連中といいます。ひとまわり廻ると劇場の中に入って、役者の声色を使いました。

このようにして真夜中も過ぎ、暁八ツになると一番太鼓が打たれます。明け方に二番太鼓が打たれると、この手打ち連中をうまく外に追い出して観客を入れました。舞台の引き幕を開けると、真ん中には御神酒とお餅を載せた三宝が飾られ、左右の大柱には「翁行灯」と呼ばれる角行灯が掛けられています。厳かな雰囲気の中に、江戸三座の座元（太夫元）、中村座では勘三郎、市村座では羽左衛門、森田座では勘弥が翁面を掛けて登場し、能楽の「式三番叟」を舞って舞台を清めました。初日から三日間、とくべつに勤められる「式三番叟」のことを「翁渡し」と呼びます。続いて中村座「酒吞童子」、市村座「七福神」、森田座「長者びらき」など、それぞれの家に伝わる「寿の狂言」（脇狂言）を演じました。大部屋の役者衆に抛る「序びらき」「二立目（ふたつめ）」の稽古芝居が終わる頃には夜も明けて、本格的な顔見世狂言が始まります。

その序幕「三立目（みたてめ）」の最後に登場するのが、顔見世吉例の英雄「暫（しば

らく）」です。天皇になれなかった親王や將軍がみずから即位して天皇を名乗り、誠実な若殿の首を刎ね、美しい姫君をお后にしようとしします。「腹出し」と呼ばれる、真っ赤で大きな腹を突き出した、真っ赤な顔の関東の荒武者が若殿や姫の首を刎ねようとするそのときに、花道の揚幕の中から「しばらく」（ちよと待った）と掛け声を掛けて颯爽と登場するので通称を「暫」といいます。「太平記」を題材にした年の顔見世では、三井寺の合戦で大塔婆を引き合ったことで知られる篠塚伊賀守など新田義貞の四天王の勇者が「暫」になりました。「義経記」では義経の郎党熊井の太郎、「平治物語」では渋谷金王丸、「東山」では荒獅子男之助など、強そうな名前の若者が選ばれてその年の暫を演じたのです。歌舞伎十八番「暫」として伝えられ現行の歌舞伎では、八幡太郎義家の前九年の役、後三年の役を題材とする「奥州攻め」の世界で、主人公は鎌倉権五郎景政という青年です。鳥海弥三郎の矢で右目を射抜かれながら、弥三

郎を追いかけて射殺したという十六歳の若者です。味方の武士が景政の顔に足を掛けて右目の矢を抜こうとすると、生きながら顔を踏まれるくらいならお前を殺しおれも死ぬといった、気位の高い剛毅の若武者でもありました。

「暫」は初代市川団十郎が初演、その息子二代目団十郎が洗練して演出の原型を作りました。その孫に当たる五代目団十郎が生涯の当り役として繰り返し上演して家の芸を確立、そのまた孫の七代目団十郎が制定した歌舞伎十八番の筆頭に掲げられたものでした。「筋隈」と称される真っ赤な隈取を取った暫の顔は、「日の出の顔」と称えられました。旧暦の十一月は「顔見世月」と呼ばれるとともに、「神楽月」とも呼ばれる冬至の季節でした。「顔見世では、神楽の「一陽来復」の祈りをテーマにします。一陽は、太陽です。冬が極まって衰えてしまった太陽に向かい、ふたたび雄雄しい力を取り戻してくれと祈る願いのこゝとを「一陽来復」と呼びました。暫の日の出の顔は、夜の闇の中にふたたび登る初日の出

の姿を象徴するものだったのでしょう。

顔見世が江戸の町にひと足早い春を呼ぼうとする芝居だとすると、正月の初芝居は初春を迎える目出度さを描く芝居だといえるでしょう。その題材に選ばれたのが、『曾我物語』でした。曾我の十郎、五郎の兄弟が十八年の艱難辛苦の末に父の敵工藤祐経を討つ敵討の物語でした。主人公となったのは、弟の五郎時致でした。富士の裾野の巻狩りの夜、敵の陣屋に忍び込み本望を遂げた兄弟のうち、兄の十郎祐成は新田四郎忠常に討ち取られて花と散りました。弟の五郎時致は、女姿に化けた御所の五郎丸に生け捕られて生き恥を晒すことになるのです。浜辺で首を討たれるとき、五郎は斬りようが悪いと悪霊となって七生まで祟るぞといって睨んだといいます。睨まれた男は、わなわなと震えてしまい、それが武士にあるまじき卑怯未練な振る舞いだと非難され、奥州外が浜に配流されて死んでしまいました。江戸の歌舞伎では、このように恨みを残して死んだ若者を主人公にして、春を迎

える芝居の幕を開けました。

正月の初芝居の初日は、二日でした。のちには十五日に初日の幕が開くようになりま
す。元旦には、昼過ぎから江戸三座それぞれの
舞台で「仕初」の儀式が執り行われました。
顔見世と同じく太夫元の翁で厳肅な「式三番
叟」こと「翁渡し」が行なわれます。続いて
一座の総役者が麻袴姿で舞台に居並び、初春
の曾我狂言の名題（タイトル）などが読み上
げられます。着飾った子役の華やかな踊りが
披露されたあとに、最後には座元により「千
秋楽」の謡が謡われて、目出度く謡い納めら
れました。この日の観客は無料で入れました
ので、早朝から最前が押しかけて賑わったと
いいます。

初春の「曾我狂言」には、二つの山場があ
りました。前半を「鬼王貧家」といい、最後
の場面を「曾我の対面」と呼んでいます。後
者は、現在の歌舞伎での上演される人気の出
し物ですが、前者の「鬼王貧家」は上演され
ません。江戸時代でなければ理解しにくいテ

ーマの作品だったからだと思います。「鬼王
貧家」の主人公は、曾我兄弟の郎党、すなわ
ち家来たちでした。『曾我物語』に登場する
鬼王と団三郎、曾我兄弟の形見を曾我の老母
に届けたあと高野山で出家して唱道者となっ
て兄弟の事跡を語り伝えたとされる人物でし
た。江戸の歌舞伎では、ほんらい同僚であっ
た二人を兄弟にしました。兄になった鬼王の
名前は兄弟の家の姓になり、鬼王には新左衛
門という新しい名前が与えられています。場
面となったのは、大晦日の曾我家です。兄の
鬼王新左衛門は屋敷の中で借金取りに責め苛
まれ、部屋住みの弟団三郎は金策に外を駆け
廻っています。栄養失調のためでしょうか、
鳥目となった団三郎は悪者にいたぶられて殺
されてしまいます。家の中でじっと堪える鬼
王は、女房の月小夜や妹の十六夜と額を寄せ
合って、「四百四病の病より、貧ほど辛いも
のはないなあ」と嘆くのでした。郎党の兄弟
の艱難辛苦の末に、曾我兄弟が目出度く春を
迎えるのが「曾我の対面」でした。

ときは正月の元旦、ところは鎌倉幕府の最高權威に付いた敵工藤祐経の館です。曾我兄弟は、親友の朝比奈や愛人の遊女大磯の虎などの手引きで敵工藤に対面をします。鮮やかな赤の衣裳に白い二本の線を描いた、兄弟お揃いの「二引き」の衣裳。兄の十郎の浅黄（薄い水色）の長袴には、色系で千鳥の模様が縫い上げられています。弟の五郎の長袴には、蝶の模様が色系で美しく縫い上げられています。格好良く登場した兄弟の姿を見た、梶原親子をはじめとする鎌倉の大小名は笑い飛ばします。貧乏な曾我だから、武家装束の長袴しか持っていないのか、元旦の賀儀には公家装束で出なければならぬことも知らないのか、といった笑います。梶原親子らが主張する有職故実は、鎌倉時代のもものではありませんでした。江戸時代の徳川家の「年始登城」の大名の有職故実に従ったものでした。元旦と二日は公家装束、三日になってはじめて長袴の武家装束になるものでした。鎌倉の大小名に笑い飛ばされても、曾我兄弟は我慢

して敵工藤に対面します。血気にはやる弟は工藤に飛び掛ろうとします。それを下から兄の十郎がじっと抑える、その姿を繰り返して見せるのが「曾我の対面」でした。十八年耐えて我慢した兄弟の恨みと忍耐力、それがやがて本望を遂げる春を迎えることになるだろうということを見せるのがテーマでした。悪者に見えた敵の工藤祐経は、鎌倉幕府の重要な役職についてしまったために、わたくしの遺恨によって討たれるわけにはいきません。臯月下旬に行なわれる富士の裾野の巻狩りを無事に終えたなら兄弟に敵として討たれてやろうという度量を見せる芝居になりました。暦の上では春になったのだけでも春は名のみで、まだ肌寒い初春の正月の気分を映し出す作品になっていました。

古井戸秀夫（ふるいど・ひでお）

東京大学大学院教授。

専攻は、歌舞伎、日本舞踊。

連載

会いたい人 関 容子



笹野高史
さん
①

撮影／タカオカ邦彦

笹野さんの舞台は自由劇場時代から観ている。六本木のガラス店の地下の狭苦しい空間で間近に観る笹野さんたちは、みんな生き生きと輝いてチャーミングだった。

その後、自由劇場解散を控え、渋谷のシアター・コクーンで『上海バンスキング』の最後の上演となったときは、客席に異様な熱気が漂い、勘三郎（当時勘九郎）さん一家もどことなく興奮している様子が見て取れた。勘太郎・七之助兄弟もまだ少年だったころのこと。

それからしばらくして、今ではすっかり定着した勘三郎を中心とするコクーン歌舞伎が始まり、第一回『四谷怪談』、第二回『夏祭浪花鑑』（このときから串田和美演出になる）、そして第三回の『盟三五大切』^{（おれさんごたいせつ）}に、なんと笹野さんが登場したのにはびっくりした。笹野さんはふた役のうちのますます坊主というコミックな役で客席に混じり、突然両脇のお客の手を取って三人でバンザイをする、という

奇抜なことをやってみせたが、ある日のそのお客の一人は私だった。

「あれ、そうでしたか（笑）。それはそれは。勘三郎さんとは何かのテレビドラマで御一緒したときに、自由劇場で観たあの芝居が今までに観た中で一番面白かったんでよく憶えます、っってお声掛けられて、嬉しいなと思っただのが最初です。それはシェイクスピアの『マクベス』を串田和美さんがアレンジして、柄本明さんとわたしが女装して強盗に入って（笑）、つかまっちゃった、という設定で『護送車の中』。椅子から転げ落ちるほど笑ったんだ、とおっしゃってました。いつかこの人たちと芝居がしたいなと思った、というのが勘三郎さんのその後につながってくるわけですかね。串田さんがコクーンで歌舞伎を、と言うので、どんな劇場か見にいりましたのが、沢田研二さんの『三文オペラ』、次がその『上海バンスキング』でした」

『上海バンスキング』は、ジャズマンたちの

自由劇場の代表作「上海バンスキング」での笹野さん



人生の哀歓を古きよき時代の上海を舞台に描いた芝居で、串田さんのクラリネットを初め、テナーサクソ、トロンボーン、ベース、ドラム……と、玄人ハダシの生演奏にすっかり魅了された。

笹野さん演じるバクマツが終幕で客席通路に現われ、これも私のすぐ脇に来て演奏してくれたトランペットの音色が、今も耳の底に残っている。

「自由劇場では作曲家の林光さんがずっと音楽を担当してくださってたんですが、俳優はたとえヘタでも自分で演奏すべきだというのが持論で、かなり前から新井さんとか樋浦勉さんとかの大先輩が芝居の中で演奏をバンバンやってたんですね。その歴史を受けついで僕たちも演奏していました。で、これだけみんなが楽器ができるんなら書いてみようか、というんで、斎藤憐さんが『バンスキング』を、バンスは借金のことですけどね、書いたんです。それで昔の上海のジャズマンの資料

を死ぬほど集めて、その気質とか生活とか社会情勢とか……班に分れて研究会を開きました。演奏はジャズマンに及ばなくても、気分だけは負けないうように演じようというんですね。気持さえ持っていれば、役者っているんなことができるんだなあ、とそのとき思いましたですね」

役者の思いこみってすごい、と笹野さんが最近つくづく感じたエピソードがあるという。それは映画『武士の一分』で共演した木村拓哉さんのこと。

「キムタクさんは、殿様のお毒味役をつとめて目があいたまま見えなくなってしまう、という役でしょう。その撮影中に、昨夜車を運転してたらスリットと端に寄ってって、それを操作する力がなくて危うく事故になるところだった、と言うから、あ、目が見えないまま帰ったでしょう、と言いました。目があいてても見えないのだ、という芝居を毎日やって

幼稚園の学芸会での一枚。左が笹野さん



愛犬ハッピーと一緒に。
小学校二年生ごろ淡路島の洲本にて

ると、脳から物を見まいとする命令が出されるんですね。あの人は天才的な人で、自分を操作する力がものすごく激しいから、集中すればするほどきつとそうなるんでしょいうね。すごいね、役者って、と思いましたよ」

笹野さんはこの『武士の一分』で、悲運の主人夫婦を支える忠僕の役をいい味わいで好演し、アカデミー助演男優賞を受けた。

「山田洋次監督がそのことでコメントを求められて、今どき珍しく軽演劇の匂いのする俳優さんです、とおっしゃってくれて、へえ、そんなふうに思ってくれてたんだ、と思って嬉しかったです。わたしは淡路島の生まれで、松竹新喜劇とか吉本の喜劇とかにしよつちゅう行っていましたし、曾我廼家そがのやの流れのお婆さんものなんか、こういうのをやりたいな、と思って観てましたから、それが身体の中にしみついているんじゃないかな、と思うんです」

笹野さんの生家は代々造り酒屋で、祖父の代では「東洋長とうようちやう」というお酒がよく売れて繁

盛していたが、時代とともに事業がうまくいかなかった。

「わたしは男ばかり四人兄弟の末っ子ですが、親父は結核で、わたしが三つのときに亡くなっちゃってるのでまったく憶えてません。母親は看病で病気がうつって、それで祖母とわれわれ兄弟とはずっと実家から離れて仕送りで暮してましたから、働いてる人の姿というのを見ないで育ちました。毎朝会社へ通う人とかを見て育ってたら、今とは違う職業になったかもしれないけどね。わたしが十一のときに亡くなりました」

それでも笹野少年が学芸会でお遊戯をして、いる写真を見ると、立派に袴まで着けた着物姿だ。

「全盛のころ、兄に作ったのを母が出してくれましたかね。でも学芸会はとても恥ずかしくって、そのころ舞台は好きじゃなかったです。映画も黒川弥太郎の出る時代劇とかをよく観てましたけど、自分が演じる側になり

たいとは思わずに、監督になりたいと思ってましたからね」

笹野さんとトランペットとの出会いは、中学のブラスバンド部でだった。

「最初に楽器にさわったのはそのときですね。高校生になるとテナー・サクスが好きになって、あそころトニー・ロリンズなんかにあこがれましたからね。部活動も合唱のサークルに入ってた、演劇部で人が足りないから出てくれと言われてちよつと出た程度。とにかく高校を卒業したら早く家を出たいと思ってました。上京して日大の芸術科に入って、映画監督コースを選んで、そしたら演劇サークルがあつたので、そこへ入ったのが、この道へ進むキツカケになった、というわけですね」

笹野さんはコクーン歌舞伎、平成中村座、さらにそのニューヨーク公演と、ここ数年まったく歌舞伎出演が珍しいことではなくなっ

てきた。ちゃんと屋号まであつて、それは出身地に因む「淡路屋」。

「勘三郎さんが洒落で考えてくださった屋号です。『夏祭』の舅義平次の役はコクーン歌舞伎での再演のときからわたしの持ち役になりました。あのまっ暗な泥沼の中にスッポリ頭まで沈められる苦しさは、入った人間でないといわかりませんからね。初演の義平次だった源左衛門（当時助五郎）さんが、戦友のようにかばってくれて、耳栓とか鼻栓とか、眼の消毒法とか、いろんなことを教えてくれました。あの泥は陶器の窯元を訪ね歩いて、赤っぽい泥を探してきて溶かしたものだそうです。時間がたつと沈澱しちゃうので、毎日スタッフがかきまわして、ベツタリとした泥にする。わたしが勘三郎さんの団七に斬られてそこへ沈められると、すぐ脇の草むらのところへ首だけ出して、泥の中でじつとしてるんです。あんまりバチャバチャ音を立てると前のほうのお客さんにわかりますからね。やがて

這い上がって、二人で泥まみれになりながら芝居をする。このときはもう泥んこ遊びをする無邪気な子供みたいなものですよ」

従来の歌舞伎でもこの長町裏の場は泥場と称され、陰惨な舅殺しがかなりリアルに展開するが、しかし義平次も団七も脛のあたりまでしか泥をつけない。串田版の『夏祭』では、この本物の泥にドツプリ沈める演出が話題になり、ニューヨーク公演のときもこの場の笹野さんの熱演が絶讃された。でも一度切りの映像ならともかく、舞台上で毎日泥水に入る役者の苦痛を想像すると、ちよつと耐えがたい

気持になる。

「あるとき、わたしの子供たちが舞台ま横のさくら席で見物してたことがあって、父親が泥に沈められたのをものすごく心配して見てたんでしよう。徳兵衛役の橋之助さんが、あの方も三人のお子さんのパパですからそのあたりがよくわかって、涙ぐみながら手を差しのべて引つ張りあげてくれました。でも皆さんがハラハラなさるほどのことはありませんから、もつと楽しんで観てくださいいよ(笑)」

(つづく)

古き伝統技

三代にわたる信頼

服社
有会

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)3842-11289

振替00180-2145231

江戸を歩く

増上寺から
東海道 鈴ヶ森まで

第四回

森 清鑑

古東海道周辺の情景

高輪大木戸の手前の坂道を右（西）に登ってみよう。伊皿子坂から潮見坂を汗水垂らしで登る。振り返ると眼下に江戸湾の光芒。右手は福昌寺に続いて与力同心の館。この風景の美しさを広重も描いている。

江戸湾の潮の満ち干が手に取るように分かるところから、人々は潮見坂と呼んだ。伊皿子台町に至る（現在の伊皿子交差点）と左右南北に一本の道が通っている。これが鎌倉道で古い道である。この道は三田台地の尾根伝いに引かれており、鎌倉時代からのルート。太田道灌もしばしば使い、家康も江戸入府の時にはここを歩いた。歴史の風を感じさせる道である。伊皿子は江戸よりずっと昔に中国明の人、伊皿子（インペイス）がここに住んでいたことが地名の由来である。東海道が海沿いにできた後、人々はこの道を古東海道と呼んだ。伊皿子台町を左（南）に行けば、右

手は広大な肥後熊本藩細川越中守五十四万石の中屋敷（古道に面した一部が現在の高松宮邸）。この中屋敷で大石内蔵助以下十七名が切腹した。葬られた泉岳寺は海に向かって真下にある。伊皿子台町交差点をまっすぐ降りれば、右手、魚籃寺、魚籃坂。家康の江戸入府の時と同じように、聖坂の方に下ってみる。左側は全部寺。歩きながら、右江戸湾よりを見ていこう。伊皿子台町、右角から群馬沼田藩土岐美濃守の屋敷。この辺り古道の地名は月之見崎。昼は、眼下に海が見え、夜は月を奏でる絶景地であった。沼田藩屋敷は現在、三田台公園と亀塚古墳公園になっている。公園には近年発見された貝塚をそのまま展示している。縄



潮見坂



貝塚

文人が食した見事な貝の堆積を見る。

五、六千年前には海が古道に際してより近くまできていたという証左である。隣に亀塚古墳がある。沼田藩領主はここを大切に保存した。慶応大学が調査。埴輪などが出土している。隣が浄土宗、済海寺である。元和七年（一六二二）創建。ご本尊は亀塚正観世音菩薩。亀の上に立つ珍しい観音様である。この寺からは真下に東海道が見え、海の眺望著しく、また随一の月見の名所であった。当寺は、平安時代に竹柴寺があったところと伝えられている。更級日記の作者は菅原孝標女。彼女は一〇一七年、十歳の時、上総介の任を受けた父親に同行し東国に下った。一〇二〇年任期を終えた父親とともに京に帰るべく、武蔵の国に入った。そしてここ竹柴寺に立ち寄る。そこで寺にまつわる話を聞く。「昔、当地の住人が京に任官した。ある日、帝の皇女に故郷のことを話す。皇女は行ってみたくてたまらぬことになり、二人してここに来る。帝は

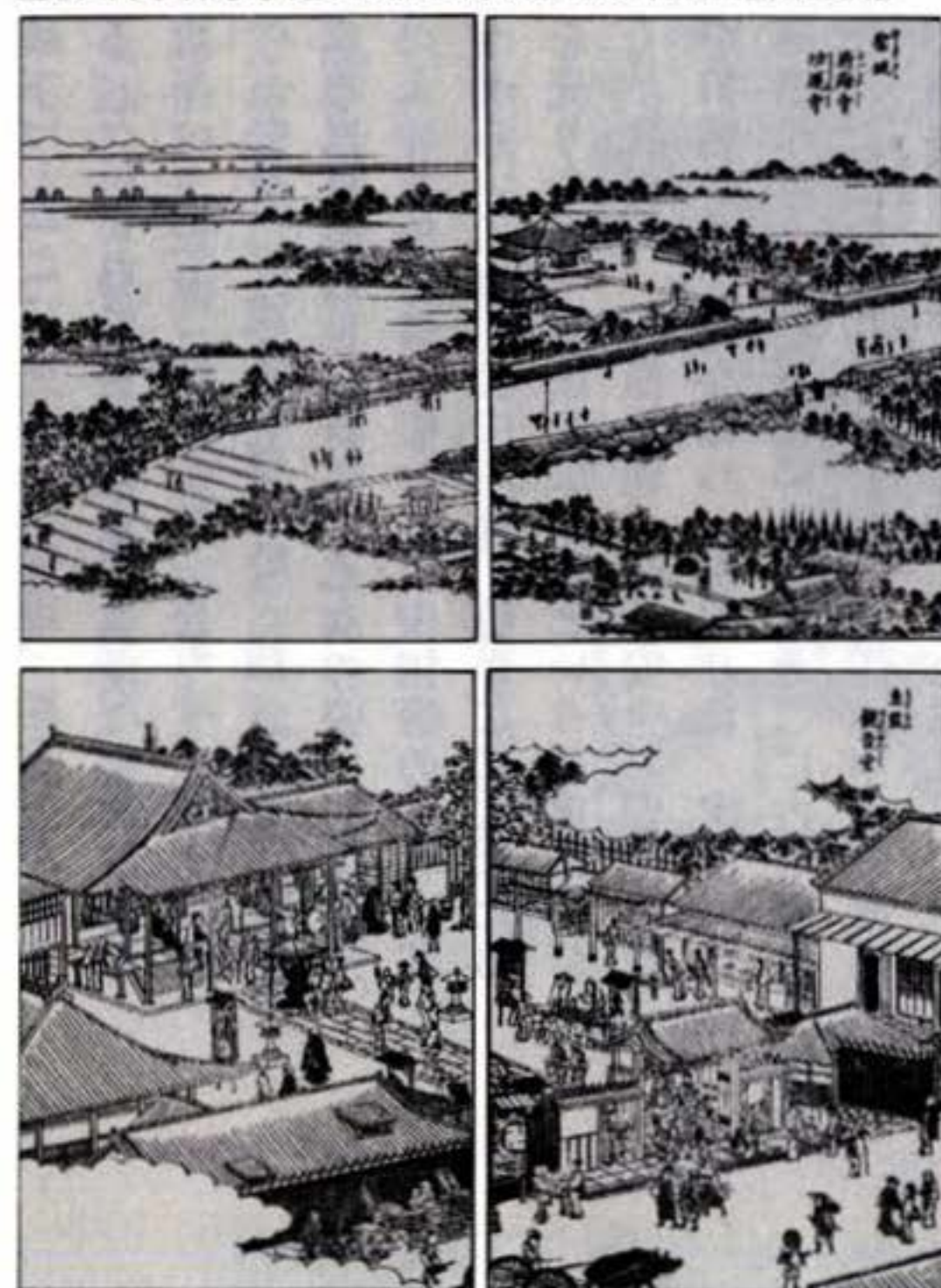
連れ戻そうとするが、娘の決意が固いため、ついに諦めて、この男に武蔵の土地を与える。皇女がここで没した後、男が建てた寺が竹柴寺」という物語が記されている。済海寺の竹柴伝説は江戸名所図会でも伝えられている。更級日記は、著者のいわば半生記であり、全く謂われのないことではないと思われる。いずれにせよ、この逸話は江戸より遙か以前に人々の文化がすでに根付いていたことを示している。古道に面した済海寺の門を入ると右側に伊豫松山藩主の大きな墓がある。ここは安政五年（一八五八）日仏修好通商条約が締結されると明治三年（一八七〇）までフランス公使宿館（領事館）として使われてきた。

古道をさらに進むと、聖坂ひじりざかを下る。聖坂は高野聖が開いたとされる坂で中世その周辺には彼らの宿所があったという。高野聖といえは、僧位は低かったが、高野山を本拠として全国に弘法大師信仰を遊行勧進した僧で、鎌倉時代になると、その諸国遍歴は全盛となった。「聖坂」という地名が、今日まで残っているとこの道の古さを証明

している。

聖坂を降り、左方向、稲荷山に向かってみよう。そこは、島原藩（長崎）松平主殿頭七万石の下屋敷（約一万二千坪）。屋敷の稲荷山からは、絶景なる眺望が望めた。明治の御世になって慶應義塾が芝新銭座からここに移転してきた。現在、南校門左上に見える、なまこ壁の建物。三田演説館。ここが義塾で最も神聖な場所である。福沢諭吉が明治六年、日本で初めて演説というものを行った場所である。それまで演説（スピーチ）や討論（ディベート）という概念は日本になかった。「演説」という言葉そのものが福沢の作った言葉である。中を覗くと奥中央に演壇。そして手前に整然と椅子が並んでいる。椅子の背には、義塾のペンの記章が刻み込まれている。隣接して西側（上方向）は、伊豫松山藩松平隠岐守十五万石の中屋敷（二万一千坪）。ここでも赤穂義士の大石主税以下十名が切腹している（現在のイタリア大使館。中央の池泉

聖坂 中央 済海寺 遠くに帆立舟が見える「江戸名所図会」



は当時のままを伝えているといわれる）。江戸期、網駒繁松の巨木が聳えていた。この二藩領地と急な網坂を挟んだ左側が会津藩松平容保下屋敷（二十三万石、三万三千坪）で南は古川まで続く（慶応女子校、中等部、慶応グラウンド、三井クラブ庭園）。

「網坂」を登り切り、右に松山藩西壁に沿って下

魚籃坂の賑わい「江戸名所図会」

れば「綱の手引き坂」。左は日向佐土原藩（宮崎）の上屋敷（三井クラブ）。渡辺綱は平安中期の武将で源頼光（よしみらいこう）四天王の筆頭。大江山酒吞童子、京都一条戻り橋での羅生門鬼の片腕を切り落とした逸話で有名であるが、この辺りに生を受けたといわれる。地名は時代を超えて連綿と残っている。

寺町

寺町を一周する。三田台町から古道を進み、聖坂を下りる。そして左に曲がる。右手に松平主殿頭屋敷（慶応）を見ながら進むと綱坂の降り口。そこから松平容保屋敷壁に沿って、三田寺町通り（桜田通り）を行く。左手を見ながら進むと、西蓮寺、大松寺に始まり、連綿と寺が続く。数えて十六番目に長松寺（ちやうしやうじ）がある。長い石段を登ると風格のある門。右に松の巨木。さらに進むと左手に本堂。その奥に、元禄時代の偉大な儒学者、荻生徂徠の墓がある。長松寺を過ぎると、左角に大信寺（魚籃

坂下）。ここには江戸三味線、開祖の墓がある。左に折れれば、魚籃坂を登ることになる。坂半ば上、左に浄土宗、魚籃寺。寛永七年（一六五二）四代家綱の時、観音堂創建。ご本尊は魚籃観世音菩薩。乙女の姿で右手に魚の入った籃を持っている。中国唐の時代、仏が美しい乙女の姿で現れ、竹かごに入れた魚を売りながら仏法を広めたという故事に基づく。江戸期、大漁祈願、交通安全、安産などを祈願して大変な賑わいを見せた。実は、江戸湾の肴と直ぐ下に降りればそこに古川がある。ここからも魚が上がる。江戸中から庶民が集まる、魚籃寺の参詣。それは江戸庶民にとって無上の楽しみでもあったのではないか。

登り切れば、三田台町（伊皿子交差点）に戻る。魚籃坂を縦線として、古道の三田台町から聖坂下までを横線とした長方形帯が全て寺である。三田、高輪、



幽霊坂標識

品川にかけては寺社が多いが、これほどの密集地帯はない。安政の頃、四十一カ寺。三田寺町の名称の由来である。周囲に大名屋敷が多く、家来までも含めて、多くの菩提寺を必要としたから、という説がある。ついでながら、寺町は、「鬼平犯科帳」の舞台としてもたびたび登場する。濟海寺の門を出て古道をちよつと左に行くと、右手に寺の密集地帯を突っ切って寺町通りまで下る、細い急な坂がある。左右は寺と墓。江戸の人々は、暗闇の中、ここを通るとき異様な不気味さを感じたのかも知れない。いつしか人々は幽霊坂と呼ぶようになった。

高輪の情景

泉岳寺

再び、東海道に戻る。高輪の大木戸から、品川宿の方へ。街道は江戸湾に面している。のどかな波が街道沿いの石垣を洗っている。前を見ると、この石垣は遠く弧を描いて、品

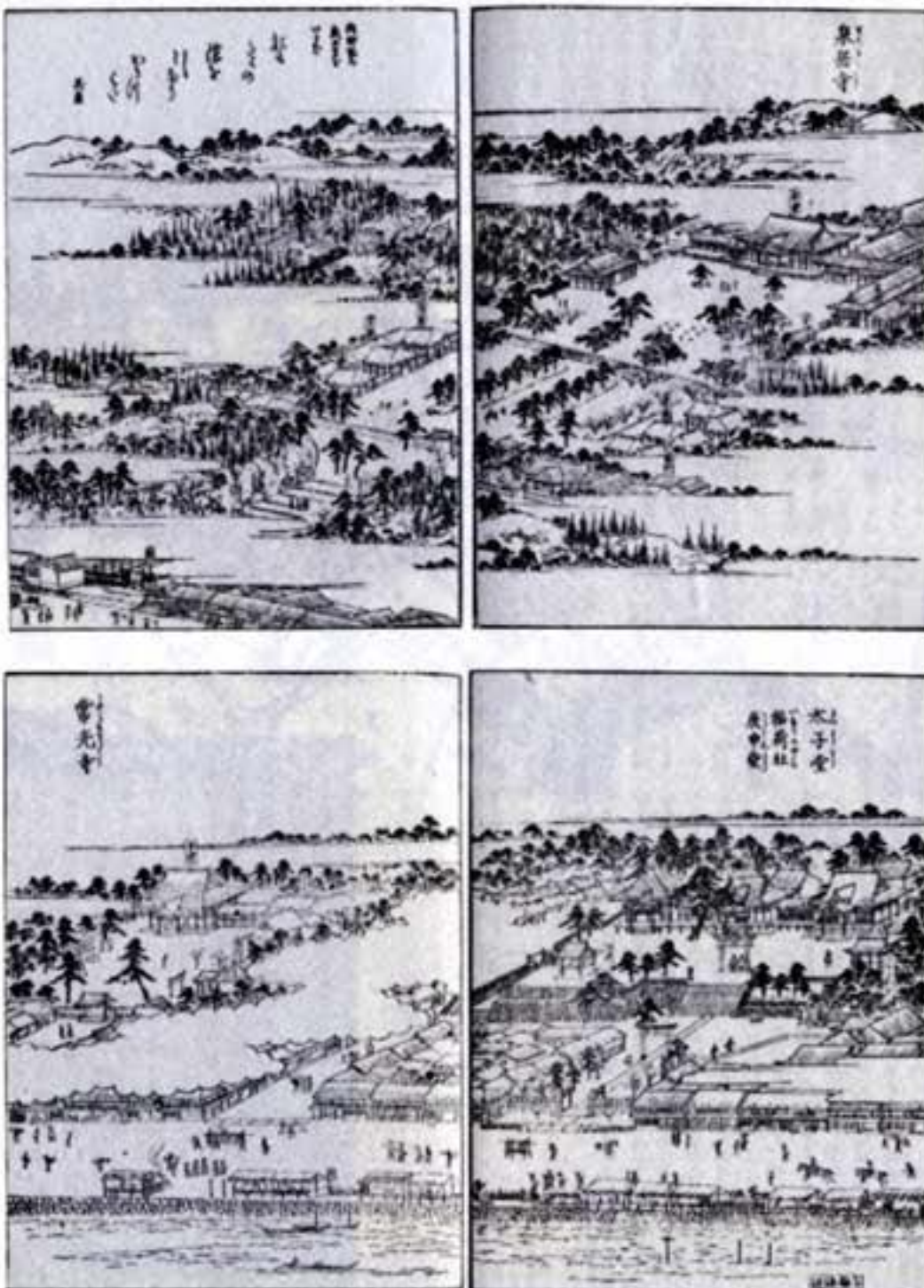


寺町古地図

川の宿へと繋がっている。都鳥が飛び交い、帆立船が優雅に浮かんでいる。やわらかな潮風が肌を包む。右側に目を転じると、民家とその背後に迫り上がる、小高い山と森が街道に沿って連綿と繋がっている。その先は典雅な八つ山と桜に覆われた御殿山が空間に広がっている。

牛町の牧舎では牛の声が響き、車町の大きな大八車の軋む音が聞こえる。連なる牛町・車町民家を割って泉岳寺の参道に入る。参道は切り通しのようになっていて、左右は崖、小高い丘の森である。段々を登り詰めると中門があり、潜ると二列の松並木が本堂に向かって並んでいる。左右には学寮が建ち並び、壮麗な山門。広い境内。正面に本堂、その裏に方丈が連なる。右は庫裏、そして左一帯は一段と高い丘と森。丘の下方に浅野内匠頭と四十七士が眠っている。泉岳寺は街道から見ると、山の中腹にある。その規模は現在の約三倍。江戸における曹洞宗の名跡である。曹洞宗と言えば、宗祖は、道元禪師。仏教の神髄を表した『正法眼蔵』（全九十五卷）で知られる。総本山は、永平寺（福井県）と総持寺（横浜鶴見）。そして江戸における曹洞宗の総括寺が泉岳寺であった。慶長十七年（一六一二年）、家康が外桜田（ホテル・オークラ近く）に泉岳寺を誘致。寺社は、三十年後

泉岳寺(江戸名所図会)左下が東海道。ここから参道に入る



の寛永の大火で焼失、高輪に移転した。その復興に尽力したのが三代將軍家光である。浅野、毛利、丹波などの五大名に命じ、七堂伽藍を配備。この時から浅野家との縁が始まる。現代、江戸期に再建された中門を潜ると、右手に大石内蔵助の銅像。風格ある松の巨木に囲まれた山門を抜けると左手に墓域。石段

高輪海辺、東海道、民家、太子堂、常光寺。(江戸名所図会)

右側に瑤池梅。瑤泉院（浅野内匠頭室）が堀部妙海尼に贈った鉢植えの梅を尼自ら植えたもの。続いて、田村右京大夫の屋敷庭（増上寺御成門から江戸城に向かった、左手の屋敷）で内匠頭が切腹の際、傍らにあり、血痕が飛び散り、付着していたといわれる「血染めの岩」、さらに吉良上野介の首を洗ったという「首洗いの井戸」が並ぶ。石段の左側には新建築の赤穂義士記念館。ここには吉良邸討ち入りに使った刀、槍、兜、衣装を含め、義士ゆかりの品々がそっくり保存・展示されている。石段を登り、墓門のところでお線香を求め、内匠頭と四十七士の墓を詣でる。

再び東海道に出る。泉岳寺南隣が天台宗如来寺。本尊五如来様は、座像各一丈あり、俗に芝の大仏おおほとけと称された。広い境内の泉岳寺寄りには山で頂に松の木に囲まれ天神様が奉られている。さらに隣接して常照寺太子堂、その裏が正覚寺。ここには「め組の喧嘩」で有名な芝火消し頭領、辰五郎の墓がある。その隣

瑤池梅



が浄土宗、常光寺。芝増上寺に属する。この辺り、江戸時代の街道周辺の情景がよく分かる。

血染めの岩



首洗いの井戸

【参考文献】「氷川清話 勝海舟自伝」 勝部真長 編 広池学園事業部 「江戸名所図会」上巻。斉藤幸雄等編 絵 長谷川雪旦、鈴木棠三、朝倉治彦 校注 角川書店。「広重の大江戸名所百景散歩」人文社 「江戸・明治・東京 重ね地図」中川啓司編

吾れ已に老いたり。年は粗八十。例えば故き車の方便もて修治して至る所あるを得るが如し。吾が身も亦然り。方便の力を以て少らく寿を留むるを得ん。自ら力めて精進し、この苦痛を忍ばん。

〔遊行經〕

私（釈迦）はもう年老いた。八十歳にもなった。

古びた車が手を変え品を変え修理を重ねて、やっとなんでいくように、私もまたさまざまな手立てを用いて、

この〔病身〕のいのちを今しばらく永らえよう。力を振り絞って精進し、この苦痛を耐え忍ぼう。

勇氣と決斷

「来週、もう一回ご相談いたしましょう」

それは懇切丁寧な説明であった。私より少々年下であろうか、近所の歯科医は私の歯茎が腫れている原因をいくつか挙げてくれた。

一つに、歯根が化膿している場合。

二つに、歯周病の場合。

三つに、その真下にある義歯が破折している場合。

そのうち、腫れ具合や痛み、位置から見て第三の可能性が一番高いという。破折した箇所からばい菌が入り込んでいるというお見立てである。

もう十数年も前のことである。右上の白歯がひどい虫歯に冒された。大きく歯を削り、神経を抜き取り、残った歯根に心棒を埋め込んで、今一度人工の歯をかたどった。

しばらくは、というより十年以上は調子がよかった。歯茎に小さな突起物があるのに気が付いたのは三、四年前のことだろうか。気になって、当時、近所に開業したばかりの歯科医に診てもらったのである。件の歯科医である。

その時の診断も、やはり先の三つの理由を挙げ、同じく第三の可能性が一番高いと言ったものの、しばらくは歯の噛み合わせを調整しながら様子を見よう

ということになった。

しかし、昨年の暮れから度々腫れるようになり、噛み合わせを調整しても腫れを繰り返すようになってしまった。しかも義歯を削るにも、もはや限界が近いというのである。

「ご相談いたしましたしょう」とは今後の治療方針のこと。

義歯を削り取り、歯根に化膿がないか確認して、今一度人工的に歯を作り直す。場合によっては歯根を抜き、差し歯（？）にするというのである。

できれば自分の歯は失いたくない。様子を見たまま事無き状態を続けるのがベストではあるけれども、事態はそう楽観視できそうもない。すでに歯科医の説明は理解できた。治療方針についても納得している。ただ気になるのは治療期間である。最悪の場合、半年はかかるという。

ところで、お釈迦さまが亡くなったのは二月であるが、その前年の夏、死を覚悟するほどの病に冒された。しかし、その時、ほとんどの弟子たちは修行の旅に出て不在。弟子たちのために教えという教えはすべて説き終えていたけれども、まだ言い残したことがあったという。それは弟子たちが「自分自身に帰依し、教えに帰依し、それ以外のものに帰依するな」ということ。

これを伝えたいがためにお釈迦さまは、弟子たちが戻ってくるまでは精進して苦痛を取り除き、いのちを永らえようと決断されたのである。

精進は梵語で「ヴィールヤ」という。「勇気」という意味がある。為すべき事のために、あらゆる苦難に立ち向かう。その勇気を振り絞ることが精進なのである。

さて、私の場合、近々「ご相談」に決断を下さなければならない。もちろん、必要な治療は受けるつもりでいるが、じつは私は笛を吹く。善光寺大本願雅楽会に所属し、この二月には大切な演奏会を控えている。しかし歯を欠いた状態での演奏には不安が残る。口の中でどんな息の流れになるのか想像が付かないのである。

はたして演奏会の前に新たな治療を受け容れていいものか、あるいは先延ばしにして悪化させることはないのか。どちらに決断するにしても、少しばかり勇気が必要なようである。

（浄土宗総合研究所 袖山榮輝）

映像の なかの寺院



佐々木美冬

近頃は、テレビ放送の多様化やDVDの普及によって、昔の映画が簡単に観られるようになった。リバイバル上映を捜し求めて、名画座から名画座へ走った頃を思うと、まるで夢のようである。製作が昭和三十一年というから、おそろしく大昔となるが、日活映画『乳母車』を観たのも何か何処かのCS放送であった。もちろんカラーではない、モノクロ映画。しかし、ある世代にとっては懐かしい映画である。主演の二人は、石原裕次郎と芦川いづみ。原作は石坂洋次郎、監督は田坂具隆である。かいつまんでストーリーを述べる。芦川いづみの父親（これが何と宇野重吉）が愛人（新珠三千代。こちらも浣潮として若い若い）を作ったという。友人たちの噂話でこのことを聞き知った女子大生芦川いづみは鎌倉の自宅から、わざわざ愛人宅を訪ねるのであった。すると玄関に迎え出たのが新珠の弟の裕次郎（こちらも工学部系の大学生）なの

である。あろうことか、愛人には生後一年にも満たぬ赤ちゃんが出来ている。新珠と芦川が互いに当惑しつつ、探り合うように、複雑な表情で挨拶している間に、裕次郎は赤ちゃんを乳母車に乗せて散歩に出るのである。一方、父の愛人とはじめて出会ってしまった衝撃に、芦川いづみは帰途、ふらふらと歩く。そして大きな石の上に昼寝を決め込んでいる裕次郎と、その下の乳母車にすやすや眠っている赤ちゃんに遭遇するのである。芦川は、衝動的にその乳母車をそっと押して離れ、これといった悪意もなく、新珠の家に戻してしまうのだが、目覚めた裕次郎は青褪める。必死で探す。走り回る。そこらじゅうの人に訊ね、交番にも手配を頼む。

真夏のこのシーンのすべてが、浄土宗九品仏浄真寺の境内とその周辺のロケなのである。終戦から十年、まだまだ戦後。未整備な境内はひたすら広大で、有名な榎や銀

杏の大樹の下に陽を除けている老人たちがのんびりと坐っている。東急大井町線の駅も駅前も懐かしい。歳をとったせいかな、昔の映画を観ると、物語の展開よりも映りこんでくる背景ばかりを観てしまう。それが古い東京ならば、なおさらいい。商店も電柱も公衆電話も踏切も看板もみな懐かしい。なにより浄真寺がよい。この地はもともと世田谷城主吉良氏の家臣、大平清九郎の居館（奥沢城）の跡。寛文五年、寺地が認められ延宝六年、珂碩上人によって開山、創建された。本堂と対面して三つの阿弥陀堂があり、上品上生から下品下生まで堂のそれぞれに三体、計九体の阿弥陀如来像が安置されている。三年に一度の「お面かぶり」は特に有名だが、普段訪れても雅趣あふれる寺院である。

ところで、映画やテレビドラマに寺院や僧侶が出てくると、我々はどうも構えてしまうようだ。職業病ともいえるが、とりあ

えず宗派を確認しようとする。科白など聞かず、BGMに過ぎない読経の方に耳を澄まし経典を聞き分け、僧侶の袈裟を吟味する。墓地のシーンだとまず塔婆を見る。明らかに禅宗系の設定なのに塔婆の裏が全部「入二法句」だったりすると、ひどく疲れる。葬儀のシーンでは戒名を確認する。変な観客であり、妙な視聴者になってしまうのである。もちろん、安心して観られるものもある。二〇〇三年の冬のドラマに「ハコイリムスメ!」というのがあった。当時人気の飯島直子や深田恭子が出ていたから、ご覧になった方も多いかもしれない。主演飯島直子が結婚式をあげるはずだった寺院が浄土宗だった。茨城県は水海道、亀岡山報国寺である。

京都ロケともなると話は別格である。とりわけ嵯峨の清凉寺が凄い。もともと、これは時代劇専門とっていい。鬼平犯科帳では内藤新宿の天竜寺に見立てて使われた。

江戸の話を京都で撮るのは時代劇なら常識である。いまの内藤新宿など、何処にカメラを向けても高層ビルが映りこむ。浅草も然り。ロケは京都に限るのである。鬼平シリーズでは、毎回決まったエンディングがあった。ここに清凉寺山門から見越す本堂が、ギターの曲をバックに、何と浅草寺に見立てて使用されている。いったいに浅草寺の設定で使われることは多く「雨の湯豆腐の巻」では殺し屋の時次郎が縁日をセツトした参道で蝦蟇^{がま}の油売りを見ている越後屋を針で一突きにして殺すシーンが撮られた。同じく池波正太郎原作物に剣客商売があるが、こちらのドラマでも浅草寺や秋葉権現に見立てて、使われている。長七郎江戸日記、江戸中町奉行所、大奥、北大路欣也の大岡越前等々、のドラマにも多宝塔、弁天堂、池、回廊などが映りこみ、他のいろいろな場所に見えるよう工夫して撮られている。此処、浄土宗の名刹清凉寺は嵯峨

釈迦堂として、人々に親しまれる。元は源融の別荘。寛和二年(九八六)に寺とされた。本尊釈迦如来は、胎内に五色の絹で作った五臓六腑と経文を持し、生身のお釈迦様と呼ばれてきた。お松明、ガンデンデンの囃子で有名な嵯峨大念佛狂言が催される。化野の念仏寺もロケ地として頻出する。暗闇仕留人「自滅して候」では鐘楼と墓。鬼平犯科帳「凶剣」では長谷川平蔵が上洛中という設定で、化野念仏寺の仏の間をゆく平蔵のシーン。あるいは山崎努版の雲霧仁左衛門最終回のイメージ・シーン。岡っ引どぶ「京洛殺人事件」では公卿が惨殺死体となつて仰向けに石仏群のなかに倒れこんでいる絵。必殺!の中村主水は此处で立回り。名刀一閃、松明を切り裂く。

大島渚監督の映画「御法度」の新撰組屯所は浄土宗総本山知恩院、御影堂で撮った。史実としての屯所は西本願寺なのである。映画の中で、浄土宗と浄土真宗がオーバ

ー・ラップしたのである。大島渚は美術監督・西岡善信に「史実通りに」という要請をしたという。セットは凝りに凝ったものだったが、なるほど、史実より奇なり、である。

見立て、というものは面白い。黒門は江戸城平河門。北門が大奥御広敷御門や江戸城大手門、大坂城代屋敷となった時代劇は数多い。知恩院はあのハリウッド映画「ラスト・サムライ」にも出て来る。冒頭、オールグレン大尉がミカドに会いにゆくシーンである。CG処理かなにかで楼閣が合成されているが、知恩院参道が映っている。この映画では他にも、勝元がミカドに意見を言上するくだりで本堂脇の渡り廊下も使われた。

(ささきみふゆ コラムニスト 蓮門小子)

この稿を起すにあたり、サイトAGUA <http://agua.jp.org/index.html>「時代劇の風景」を参考にさせていただきました。まことに有難うございました。

下屋敷を歩く

句会報告

内藤隼人

一月八日。前々日の氷雨、前日の強風が嘘のように晴れ渡った祭日である。わが句会の快晴記録はいつまで続くのだろうか。どと、つい贅沢な心配をしてしまう。かつての成人の日より一週間も早い違和感にもめげず、十三名がJR恵比寿駅に集まった。東口である。これが馴染めない。昔の恵比寿駅は小さな改札がひとつだった。その西口のイメージが強い。東口は三階にあるという。その言い方がすでに変である。駅な

のかビルなのかはつきりしてほしい。東口からのただの「動く歩道」をスカイウォークと呼ぶらしい。それもかなり腹が立つ。わざと「歩く歩道」を歩いてガーデンプレイスに出る。ビールの誘惑にもめげず、聖心女子大にも慶応女子高にもふらつかず、実に俳味に乏しい人工の街を抜ける。祭日なのに人出がない。思いっきり少ない。おい恵比寿、大丈夫なのか。昨年暮に同じようなメンバーで横浜吟行をした。マイカル

本牧という場所を見た。ゴージャスな造りのビル群の全てそこらじゅうが抜け殻。貸店舗、貸事務所の貼り紙だらけであった。実に無残な、真新しい「廃墟」を我々はつぶさに見学したばかりであった。諸行無常ってなことに敏感になっている我々であった。長者丸からプラチナ通りへ。ランジェリー・ショップや北欧家具屋、オープン・カフェなどを眺めながら歩く。私のような下町の人間は「馬っ鹿じゃないの、この街」と思う。駄菓子屋、写真館、荒物屋、床屋、豆腐屋、居酒屋、銭湯が無いのである。人間の居場所が無いのである。ようやく目黒通りに突き当たり、渡れば、もう上大崎の台地である。

此処は浄土宗寺院八ヶ寺によって形成される寺町。浄土宗東京教区域南組、この白金の寺町の通称は下屋敷。

寛文元年（一六六一）から天和四年（一六八四）にかけて、幕府による土地公収の

ため、麻布近辺の増上寺支院が上大崎村の増上寺下屋敷内に移ったからである。吸収合併いろいろあって、いまは、最上寺・清岸寺・本願寺・戒法寺・光取寺・常光寺・隆崇院・月窓院の八ヶ寺。

福沢諭吉はこの台地上の小寺院街のたたずまいを好み、正福寺（現在は常光寺に合併）を自分の墓所に選んだ。昭和五二年に麻布善福寺に改葬されたが、常光寺には諭吉永眠の地碑が残る。他に、戒法寺には江戸の戯作者高井蘭山の墓、月窓院には歴代の坂東三津五郎の墓、隆崇院には日本画の巨匠伊藤深水の墓と深水一門による天井絵がある。樹齢二五〇年といわれる清岸寺の桜なども、この八ヶ寺の名物。

さて、我々の姿は既に戒法寺客殿にあったのである。高台の此処からは思い切り冬の碧空が見える、たなびく白雲が見える。佳い座敷に暖房がよく効いて眠くなるほど

である。住職心尽くしの地酒セットもある。
全員すっかり、いい気持ち。

寒鴉表札よりも高く飛ぶ

狂流

薄氷のごとく老母の横たはる

栞

薄氷の下に金魚の煌々と

裕

蠟梅や少年の日の逆上がり

かまちん

薄氷のやましき泡を閉じ込める

吾郎

松過ぎて戒法寺から消える酒

烏鷺坊

海光る日の手袋のやはらかし

篠

薄氷を少し揺らして出棺す

仁

雪の風だな首すじを違えたる

振り子

淑気かな白金台に尿して

東人

薄氷やとぎ汁重き朝支度

貞華

薄氷を端から踏んで帰り道

勝之

全霊をこめて手を振り寒に入る

真理子

五時半には終了して、目黒駅方面右側の
居酒屋に乱入。十一時過ぎまで、どですか
でんと呑みまくり、喰いまくって、一人二
千円とはこれ如何に。この街って、結構い
いかも。さっき悪態ついたことはすっかり
忘れて、恵比寿、目黒のことをきっちり
見直すことのできる、素直で素朴な我々で
あった。

(ないとうはやと 俳人)

FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●梅

〔特選〕梅林の奥へ奥へとじようびたき 和田 仁

観梅だろう。じようびたきの澄んだ声が聞こえる。行くに従って鳥も奥へ移ってゆく。多分縄張りなのだろう。人間のほうからすれば迎えてくれると聞こえようが、鳥にとっては警戒の鳴き声に違いない。

〔佳作〕紅梅の花ほぐれゆく夕べかな

河合富美枝

土塀沿い路にせり出す枝垂れ梅

浜口 佳春

来客と梅干し談義冬まつら

伊藤寿美子

●薄氷

〔特選〕薄氷にとどまる月の光かな

中島富士子

池にするか田の面とするか、その辺は読者に任されているが、ある程度の広さは必要だろう。月影が薄氷に映って、にぶい光を放つ

ているのである。夜が更けて、寒さはいよいよ身にしみてくる。

〔佳作〕 蹲踞の薄氷に日の射して来し

金谷 友江

古池のまぶたのような薄氷

狭山 棹

朝日さす薄氷瞬時虹の色

石原 新

●自由題

〔特選〕 詩の友の他に友なし秋の暮れ

直田 豊人

詩はここでは俳句と決めてよかろう。作者

に元から他の友がいなかった訳ではあるまいが、作句にはまり込んでいくうちに、いつの間にか句友が増え、それにつれて他の友がいなくなってしまったのだ。

〔佳作〕 夜の更けて雪となるらし出羽の山

佐藤 雅子

かき揚げのさくりと冬に入りにつけり

寺下 忠至

遅れ着く荷船を待ちぬ初時雨

池田 伊吹



兼題 切符 歌 自由題

(季語ではありません)

浄土誌上句会の
お知らせ

梅

親梅や友とつれだち投句箱

老梅や住み古る人よ札所寺

どの枝も天に向ひて野梅かな

淡雪を梅育に染める子らの笑み

産声に安堵の家族梅匂う

梅の香が谷の底から湧いて来る

川底にためいる光梅日和

庭の梅遅し遅しと今日咲きぬ

金谷 友江

佐藤 雅子

中島富士子

川田 幸仁

井村 善也

奥中 晚暉

石原 新

谷 しげ子

薄氷

薄氷に映る月影神の森

薄氷の岸边に鴨の屯して

薄氷を踏み踏み急ぐ登校児

河合富美枝

佐藤 雅子

伊藤寿美子

締切・二〇〇七年二月二十日
発表・『浄土』二〇〇七年五月号

選者・増田河郎子 (『南風』主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

薄氷や頼るものなく漂えり
薄氷を割って市場へくる男
薄氷を踏んで村人寺詣り

浜口 佳春
増田 信子
奥中 晚暉

自由題

紅葉且つ散る護国寺の大樹かな

香袋ふと匂ひ来る時雨坂

仲良くも悪くも双子手まりつく

陽だまりの次の陽だまり冬堇

人日の寺の下駄箱大いなる

冬天に大鍋中国大使館

福笑ひして旧姓で出る電話

豪邸に鴉とまりけり冬日和

陸橋の退屈を鳴く初鴉

人日の雲へらへらと坂の上

からだにも寒燈ありて男女かな

金谷 友江

河合富美枝

中島富士子

内藤 隼人

和田 仁

大森 栞

井草 芳郎

鈴木真理子

横浜 裕子

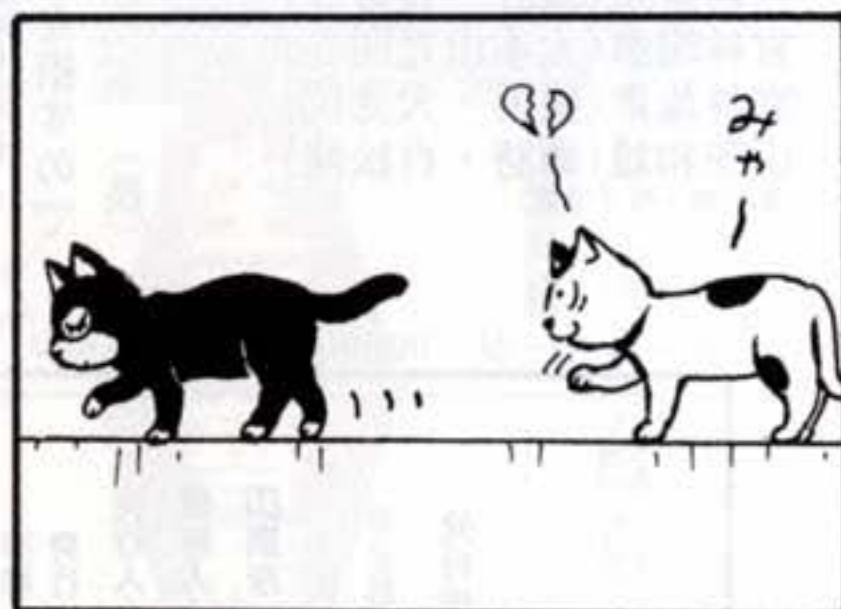
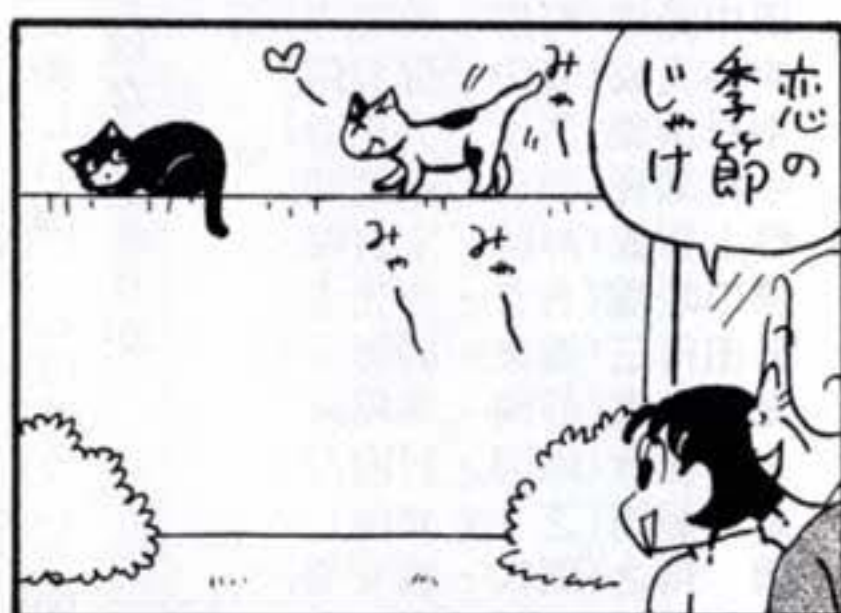
目黒 裕

坂下 優子

さっちゃんねネッ

38 かい目

かまち♡よろう



編集後記

本堂の屋根に一羽の鳥啼く

岱潤

先日友人から我が国の年次別自殺者数の表を戴いた。昭和五三年に二万人を突破した自殺者は、その後増え続け、平成一〇年には三万人を突破し、その後一昨年まで一度も三万人を割ることなく、八年平均で三二、五四五人にもなっている。常に男性が女性の倍以上を数え、平成一五年には男性だけで二四、〇〇〇人を超えている。

この過去三〇年の統計表を見ていると、暗然たる思いが胸を占める。実際にはこの数の何倍もの人が未遂に終わっている事を想像すると、更に胸が痛くなってしまう。

ヒマラヤの懐にあるブータン王国では、昨年初めて国勢調査を実施したそう。その質問の中に、「あなたは幸せですか」という項目があり、驚いたことに国民の九七％が「イエス」と答えているという。そしてさらに「とても幸せ」と答えた国民が四五％で、都市部も農村部も大差はなかったという。

筆者も二〇年近く前ブータン王国を訪れたことがある。当時信号機が国にひとつしかないような国であったが、のどかな田園風景と犯罪件数ゼロという国民の人柄に、ボランティアで行った我々が、心を豊かにしてもらった思い出がある。「美しい国」とはそういう国を指すのではないだろうか。

(長)

追悼
本誌維持会員
大本山清浄華院法主
大田秀三台下、一月一九日御遷化されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

雑誌「浄土」
特別、維持、賛助会員の方々
飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
江口定信(浦安・大蓮寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮眞(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
舩博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkkan-jodo.info>

浄土

七十三巻二・三月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十九年 一月二十日

発行 平成十九年 二月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四 明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

※シネマ随想はお休みさせていただきます。

連載

教えと法話

人^{にん}能^{のう}自^じ度^ど

人よく自らを度す
無量寿経

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

生野善應

救いは、自らの努力を前提として
はじめて、与えられる。

自分が精一杯努力するとき、意外にうまく行く
ことが多いものです。人が目標を明確にして主体
性を持ち、継続的に努力するときこそ、人知れず
ほとけのはからいが与えられるのではないでしょ
うか。他力本願とは人がなにもしないのに、仏が

ケアしてくれる意味ではないでしょう。人の努力
に方向性がなければ、仏ははからいを発揮し
ようがありません。仏の救いとはかくなるものである、
とわたくしは確信します。

法然上人鑽仰会の

本



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法47×59cm

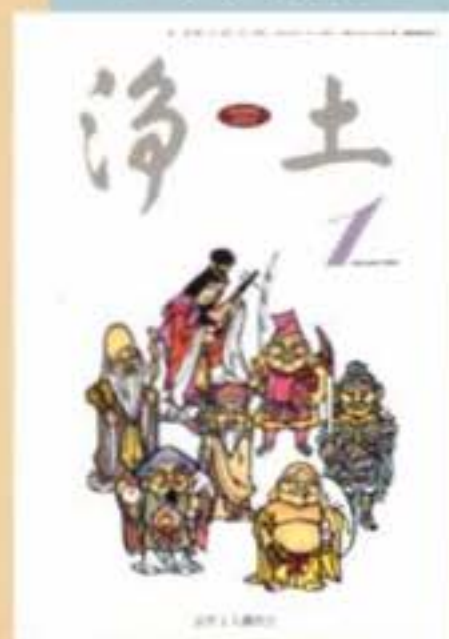


選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会
電話 / 03-3578-6947
FAX / 03-3578-7036